

付録 果菜園荒地年報二〇一四

季節が巡ってまた果菜園の出来事をふり返る年末になった。去年は、樹齢三十年のナシとようやく成長したリンゴとが初めて実をつけたことを喜んで、年報を書く気になった。二年目から年報の類は新鮮さを失うものだが、果樹の大半がまだ幼少なので、しばらくは書き加えることがあるだろう。それに、天候が記載を求めることもある。実際にこの三年間早に大汗をかいだのに、一転、今年は夏の長雨に降りこめられた。やはり地球温暖化のせいだろうか、果菜園荒地で、野菜と果樹と園丁とに過酷な天候が続く。

春先までの一通りの準備は順調だった。三月末に旅に出かけて、ナシの大敵の赤星病に對する薬剤散布が少しおろそかになったが、果樹の花はみな開いた。大手術をした梅もいくらか花をつけて健在。三年前に植えたのと実生とのスモモの花も新たに咲いた。去年植えたモモはいたわって、花が枯れると摘花。肥料をやりすぎて樹勢が弱ったミカンを一本移植し、毎年九州の甘木から来る植木屋で見つけた二年物の苗木に替えた。九月に収穫できるといふ早生である。樹齢三十年のスモモは、冬のあいだに大胆に枝を落としたかいが

あつて、いくらか結実。甘ガキと渋ガキは、去年の失敗があるので、ぜんぶ摘果した。二株のブドウは、三年目の木が初めて花を開き、合わせてたくさん房をつけた。グミは、去年植えた一株にまだ数個の花しかないので、大きい木の方を人工的に結実させるため、花にジベレリン溶液を散布する念の入れよう。五月になって、ナシとリンゴの摘果。ブドウも房の一部を切り取つて整形する。最初に収穫できるのはサクランボである。二十個ばかり孫たちが食べた。万事順調である。

と思つていたら、五月の中旬に大風が吹いた。わが家の雨どいが一部壊されるほど。支えの金具が潮風で腐食していたのである。海岸から約百メートル離れてまわりに家のある果菜園も被害を受けた。リンゴとスモモの枝が折れ、まだ小さなナシの実がたくさん落ちた。がっかりしてよく見ると、赤星病の対策が十分でないナシの葉には、星が誕生し始めている。スモモの小粒の実は数個しか残っていない。整形したブドウのどの房でも、まだ花芯のような実が半ば間引かれた。今年、ビワの実りは少ない。

ナシは袋かけをする頃までに数個に減つた。それにも大風の傷跡がある。スモモの実はついにみな無くなつた。今年は雨の日が多くて、たくさん実を残しているリンゴの方の袋かけをさぼつてようすを見ることにした。ともかく、実のまばらになつた房でブドウがぐんぐん大きくなつているのに希望を託す。ブラックベリーはたくさん実をつけて枝をどん

どん伸ばし、ブルーベリーの実も今年は多い。だいぶあとになって、全部摘果したつもり
の甘ガキに、実が三つ残っているのに気づいた。けなげさを見守ることにする。

雨が多くて水やりの苦勞がないとのんきにかまえているうちに梅雨が来て、ブドウなどの
成長がとまったのが気になります。やっと梅雨が明けて強い陽射しになったと思ったら、
八月に入って気象庁が「八月豪雨」と名づけた長雨が続く。九月になっても雲と雨。結局、
この夏の日照時間は例年の四分の一というはめに。ブドウは、全部色づいた房はなく、み
な半分が緑のまま、甘みが少なかった。大風で房ごとの実の数が減ったのをいいことに、
房の間引きを躊躇したことも原因だろう。数個の早生のリングゴはおいしかったが、たくさ
ん生った方は赤みも帯びず、今年も甘みが足りなかった。こちらは袋かけもしなかったの
で皮によごれまでついている。ナシは傷のついたのが三個。雨が多かったことが幸いた
のはイチジクで、二株とも木が大きくなったぶん十分収穫できた。肥料のやりすぎか葉の
色の悪かった二株のミカンも、弱った根でもしつかり水を吸収できたのだろう、甘くて大
きい実が八個獲れた。来年を期待しよう。初なりの甘ガキもまずまずだった。

クリは、去年の早による被害と同様に、今年は日照不足からやはり八月にたくさんの未
熟の実を落とした。それでも、自家の消費分はなんとか収穫。そうそう、ジベレリン溶液

で処理したグミは一つも実をつけなかった。隣の家にグミが生っていて、その近くに実生で生えた木だから、てっきり栽培種のグミだと考えたのは誤りだった。グミと同種の野生種の実を食べた小鳥が運んできたのだろう。移植のときの水やり以来手をかけた木を根元から伐って、除草剤の原液を傷口に注いで成仏してもらい、まだ売っていた苗木に替えた。自家受粉すると書いてあるから、もう一本のグミの木のよい相方になるだろう。

果物の収穫は期待したよりも少なかったので、家の中庭の矮性のしだれ桃のことをここに書いておく。美しい花が三つの小さな実をむすんで、おいしかった。中庭には姫林檎の小さな木もあるが、数片咲いた花は実にならなかった。つけたせば、離れたところにある狭い耕作放棄地で、デコポンが今年初めて四つ実をつけた。ぬすびとが出なければよいが。ここには以前、夫婦のキウイと、果樹ではないけれどシキミも植えたのだが、いずれも早く枯れて果てた。シキミの枝を供えることもできなかった。

柑橘類のデコポン・レモン・花ユズがまだ枝にあつて、永らえている。

野菜は、去年と同じように、キュウリ・ナスビ・トマト・ピーマン・トウガラシ・オクラ・メロン・スイカ・トウモロコシを植えた。今年はスイカの受粉を手伝ったおかげで七個の実がついたが、一つカラスかなにかに試食されたので網でおおう。しかし、孫に食べ

させるため早めにスイカとメロンをそれぞれ二個収穫してしばらくすると、長雨のせいで茎や葉の元気がなくなった。まもなくスイカやメロンはよく熟れないうちに蔓から離れだす。トウモロコシは、充実していないのが数本だけ。二株のナスビの木は、わが果菜園のサクランボやミカンの木よりも大きくなったのに、花を咲かせるだけで実をつけず、あだ花という言葉の具象としてだけの存在になり果てた。つまり、野菜は自慢できるほど獲れなかった。

ただし、雨にたたられる前に収穫した玉ねぎは好成績だった。去年連れ合いが不在のうちに園丁一人で三百本植えたものだから特記しておく。新顔を紹介すれば、初めて植えた枝豆は、カメムシを養うのに貢献しただけ。四角豆は酷な天候にも負けず四角に張ってよく耐えた。葉物野菜のツユムラサキとモロヘイヤも強い。ツユムラサキは秋になっても蔓を伸ばし、青々とした立派な葉を生産し続けた。補足すると、株の増えたイチゴは今年駄目だったが、ランナーがいくつも走って三代目の根城を築いたので、秋に植え替えてみた。来年どうなるか見ものである。

草木を大切にすれば、おりおりに気がかりが生じて園丁の作業は尽きない。真冬の剪定から始まって、星の誕生をくい止めるという大事業を為し、桃の花に見とれているとその

うち枝の先端が黒くなるという異変に対処しなければならない。梅の木のカイガラムシ退治という勇ましくもない戦いもある。雑草との戦いについては、車輪のついた手押しの草刈り機があることを知り、それを買ったことを言っておかなければならない。臆病な園丁は、肩にかけて左右にはらう草刈り機は自他に危険だと考え、これまで昔ながらの鎌で苦戦していたのである。これで作業が二、三倍速くなった。

そのように作業は多く、今年も手ばかりはたくさんあったのだが、やはり、園丁の作務は楽しめと言うべきである。三月に阿蘇であった大学の同級会で、野菜作りのことを話す同窓に誘われて、車で分散しての帰途その菜園を見物した。よく手入れしてあるそれを見ながら、人に話したくなるという心理が理解できると思った。記録するまでもないことをとくとくと書くこの年報も、そういう心理がさせるわざである。

先日、今年最後の作業として果樹に寒肥を献上した。草木を育てるとはこういうことなのだとしりつつある。だが、自分自身を育てることはあい変わらずむずかしい。年ごとに、果菜に手を貸して相手にする天気は、とても人知の及ぶところではないことを再認識し、天と地への敬いはいつそう増す。